

---

# ネメシスとして幻想入り

xhanku

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ネメシスとして幻想入り

### 【Nコード】

N5420Z

### 【作者名】

xhanku

### 【あらすじ】

目が覚めれば知らない森の中・・・

え？どこここ？何この体、触手とか気持ち悪ッ！え？これが自分？！

嫌だあああああああ！！！！！！！！！！！

不定期更新です。あと、作り直しましたー^^ ;

## ぶろろーぐ(前書き)

作り直しましたー^^;

この回だけちょっと変ですが、次からは直します。



「ガチッ！」

ん？金属音？

なんで立ち上がったときに金属音？

足元には草とか土とかしか無いは……ず……

うん、無いよね？足元に危険な鉄の砲筒とか沢山の筒が着いた回転する鉄砲なんて、存在してないよね？！

あれか？もしかしてあれなのか？！『転生しちゃいましたー、升選チートばせると面倒なので、テキストにやつちやいました』ってやつなのか？！

……とりあえず、拾っておこう。

「ステインガーマサイルを拾った。」

・・・どうしよう、頭が付いていかない・・・Help Me  
E E E R I N N N N ! ! ! !

あ、ついノリで友達の真似しちゃった

じゃねえ！そうじゃねえ！有名なホラーゲーのバオのアイテム拾ったときのテロップみたいなのが流れたけど？！

ってことは、探せばあの有名な回復アイテムもあるってことか？

とりあえず、探してみよう

「ハーブを拾いますか？」

> はい　いいえ

あった……しかも今度は選択肢付きで……

とりあえず、『はい』を選ぶだろ。

「ハーブを拾いました。」

うお！なんだか面白くなってきたぞ！だけど、これどうやって使うんだ？

あ、なんか目つぶったら、やっぱりあの有名なバイのメニューが開いた。

……言いたいことは山ほどあるけど、とりあえず頭の鎮静用に、ハーブを

「ここでは使えません」



え？何これ？ハーブって回復アイテムでしょ？あ！そっか！調合すればいいのか！なら他にも探さなきゃだな！

ハハハ！俺ってばてーんさーい！

じゃあ、もう一つの鉄砲を取って「M202ミニガンを拾いました」「さっそく薬草探しだ！

・・・よし、とりあえず現実逃避はこのくらいでいいだろう。

何？このロングコートと巨体は。

しかも堅くて屈強だし。

あと何気に腕に触手が入ってるんだけど。気持ち悪！

ん？この触手って、尖ってないか？

ロングコート＋巨体〓巨人

巨人＋触手〓この組み合わせはどう考えても『<sup>B</sup> <sup>O</sup> <sup>W</sup>生物兵器』

B・O・W＋ロケラン＋ガトリング・・・追跡者？

絶対そうだ！そうに決まってる！じゃなきゃこんな物やこんな体をしているワケがない！

よし！それで確定！この話はもう終わり！じゃあ目的を戻してハブ探しだ！

では！出発だ！わはー！おいしそうなのがいたのだー！・・・誰？！

え？何もいなくね？じゃあ誰の声？

「ここなのだー！」うーん、頭をひねっても答えは出ないなあー  
「無視するなー！」だって、ここには俺と空飛ぶ幼女しかいないんだもん

「うっ、食べてやるのだー！」

「何を食べるの？」

「あ！やっと返事してくれたー！じゃあ早速、いただきまーす！」

え？ちょ！なんでこっち来て・・・痛ッ！腕を噛むんじゃない！痛いってば！イタタ！

## ぶろろーぐ(後書き)

相変わらずの駄文カー

ご指摘、クレーム、感想、アドバイス、その他もろもろ何かありましたらよろしくお願いいたします……

毎月7日は「そーなのかー」（前書き）

サブタイはいつも適当です。

あと

「D E N G E R!この小説は、駄文という物が含まれています。T  
ウィルス以上に危険です。」

毎月7日は「そーなのかー」

腕を噛まれて数秒後

S i d e N E M S I S

「うえ〜・・・不味いのだ〜」

目の前に頂垂れる少女を見ながら心中で『ザマァーWWW』と思っ

ている。

だが、流石に可哀想に思えたので、何か探してみることにした。

「ハンバーガーを拾いますか？」

> はい　いいえ

現実から目をそらし、そのハンバーガーを拾い、項垂れる少女に渡した。

「これなら食えるだろ、食べてみろ……奪い取るなよ」

「おいしいのだー！」

「そうか、それならいいんだ」

ちょっとカッコつけて喋ってみる。

「そういえば、鬼さんはなんて名前なのだー？」

「ん？鬼？」

聞き捨てならないセリフ

「うん！だつて、人間の顔じゃないもん！・・・ちよつと怖い顔だから鬼なのだー！」

少女のことをよく見てみると、赤い瞳で、金髪にリボン、服装は黒が主体

全体的に西洋風の美少女。

そんな美少女に満面の笑みで「怖い顔」と言われる。

「ああ、組長さん・・・いや、園長先生・・・あなたの気持ちが分かった気がする・・・」

どっかの幼稚園の組長の気持ちを理解してしまった。

「ねえねえ、名前はなんなのだー？」

「え？あー」

迷う、激しく迷う・・・できるだけカツコイイ名前で行きたいところだが、流石にこの容姿では無意味

ここは、本家を借りて、本当のことを言おう・・・

「俺は、ネメシちゅ・・・」

少女との間に、気まずい沈黙が流れる。

(やべえ、噛んだ・・・どうしよう!)

「・・・ネメシスさんなのかー、じゃあまたなのだー」

少女が気まずい沈黙を破り、訂正してくれた。

そして、食べ物が無くなったことが分かり、その場を去っていった。

少女は、去り際に、頬をニヤつかせていた。

「第一印象は大事なのに、それを思いつきりダメにしてしまったなあ・・・」



なんとも言えない気持ちが、胸の奥でとぐるを巻いている。

そんな気持ちを忘れるため、またハーブ探しに戻った。

その後、赤色と黄色のハーブが見つかった。

最初に手に入れた緑色のハーブと調合し、薬を作った後、その辺を  
テキトーに散策することにした。

毎月7日は「ソーなのかー」（後書き）

・・・まずい、前作とのデジャヴな部分が・・・

やべえな・・・これなら削除する前の方がよかったかもしれない

今になって後悔

クレーム、ご指摘、感想等々 お待ちしております。

ネメシスとは女神の名前だそうだ。(前書き)

サブタイはいつもどおりテキストー

あーそうそう、”WWW”とかの表現が嫌いな人は、ブラウザバックをオススメします。

ネメシスとは女神の名前だそうだ。

Side Nemesis

調査したハーブ（赤＋黄＋緑）をを捨てようと思ったが、やはり今後のためにとっておくことにした。

「しっかしあれだなー・・・なんでネメシスになってんだ？俺」

「説明wwwしようwww」

「あ、じゃあお願いし・・・ねえよ！しかも”くさってる”の意味違ってるし！」

「え?!www」

つい呟いてしまった一言に反応したゾンビ（？）が、近くの茂みから出てきた。

ボロボロの服、所々欠けている皮膚、うめき声、完全に生ける屍である。

それなのに、”腐ってる”が”草ってる”になって、”生ける芝生”になっていた。

「というより、説明ってなんだよ・・・」

「ん？WWWあーWWW簡単WWWにWWW言うWWWとWWW君WWW転生WWWしたWWWのWWW」

サラッと衝撃発言（確定事実）を言い出したゾンビ（？）

「は？転生？いや・・・そういうのはみりゃ分か・・・っていたんだが、まさか本当だったとは」

衝撃発言に衝撃を（少し）受けたネメシス

「WWWあとなWWW升WWWはWWW入ってWWWないよWWW」

「ははは！・・・は？」

だんだん発音が人語に似てきたゾンビが、更に衝撃な発言をする。

「だからWWW升<sup>チート</sup>WWWはWWW入れられてWWWないWWWのWWW俺WWWもWWW転生WWW者WWWだからWWW分かるWWW」

「そつなのか」

「うんwwwそのwww追跡者wwwのwww能力wwwがwww  
ついでるwwwだけwww」

・・・ネメシスは、その追跡者の能力を知らなかったため、ゾンビ  
(?)に聞いてみた。

「おkwww追跡者の能力は

なるほど、説明になると草らないのね・・・

追跡者 (N e m e s i s)

B・O・W・「タイラント」の性能向上のため、新開発した寄生型  
B・O・W・「N E -」、通称「ネメシス」を寄生させた新型。

基本性能はタイラントと変わらないが、ネメシスの寄生により知能  
が格段に上昇することで、「より複雑な任務を自己の判断で継続的  
に遂行」「ロケットランチャー等の武器使用」などが可能となった。  
また、回復能力の向上作用により、タイラントが危機的状況に陥る  
事によって起こる「暴走」を抑える役目も持っている。

N E M E S I S - T型は、3つの形態を見せる。

### 第1形態

追跡者の最初の姿。

人間を大きく上回る巨体を持つ。

全身に防弾・対爆仕様の黒いコートを纏っているが、これは暴走を  
抑えるための拘束衣という面も持っている。

コートから露出した部分には、所々にネメシスの触手が巡る怪物じ  
みた外見が確認できる。

素早く走りまわり、突進しながら殴りかかる、首を絞めた後に投げ捨てるといった攻撃を仕掛けてくるが、たまに首を絞めたまま腕から触手を繰り出してくることもある。

その硬度は人間の頭部を貫通するほどで、これを受けると即死してしまう。

また、追跡者の至近距離から遅い攻撃をすると、素早く横移動して回避する。

## 第2形態

激しい戦闘により拘束衣は破れ、繰り返し与えられる肉体のダメージによりネメシス自体が肥大化、半ば暴走状態になりかけている。

腕部を縦横に巡っている触手により武器の使用が不可能になり、より激しい攻撃性を示すようになる。

即死攻撃が無くなり、攻撃力も第1形態より若干落ちているが、体力は高まっている。

右腕から垂れ下がった触手により突いたり掴んで叩き付けたりといった攻撃をしてくるが、第1形態に比べ動作が大振りなので戦いやすい。

## 第3形態

度重なる戦闘と特殊な薬液により限界を超えるダメージを受けたタ



イラントの肉体とネメシスが、お互いに暴走状態になり肥大化。

頭部や手足を失った肉体を異常発達したネメシス本体が補充し、仰向けの状態で四足歩行を行う。

腹部からは巨大な肋骨が牙のように突き出し、薬液の毒素により巨大な水疱が浮き上がっている。

最早知性を感じさせない外観になりながらも、任務遂行のためジルに迫ってくる姿はまさに「復讐の女神」の名に相応しい。

触手による攻撃のほか、体液を飛ばして攻撃してくる。

この第3形態はアメリカ軍特殊部隊がラクーンシティに持ち込んだコードネーム「パラケルススの魔剣」というレールキャノンを使わないと倒せない。

「で？そのNEMESIS-I型ってのが俺なワケ？」

「じもつともWWW」

「いや、そんなこと言われても・・・つか、NE・・・ってなんだよ・・・」

「それは

NE -

アンブレラのフランス研究所で開発されたミミズのような姿の寄生型 B・O・W で、通称「ネメシス」。

知能に特化しており、それ自体では何もできない。

他の T 生物の脊髄に移植されるとその体内の T - ウイルスを取り込み増殖、延髄付近に独自の脳を形成し、宿主の脳機能を乗っ取り知能を支配、同時に細胞賦活成分を分泌し再生力を高める。

しかし、寄生された生体に非常な負荷がかかるため、元から強靱な B・O・W でなければ耐えることができずに死亡してしまう。

「NE -」型のサンプルは、アークレイ山地の洋館の地下にある研究所にも届けられており、リサ・トレヴァーがその被検体となっているが、ネメシスは彼女の脳に寄生することなくその身体に取り込まれてしまっている。

「・・・聞きたいことは山々あるんだが・・・まず、これはどの情報だ？」

「え？WWWこれはWWWウィク「ストップ！ストップ！」WWWどうした？WWW」

ゾンビが、いけない発言をしそうになったので、それを防ぐネメシス鬼のようなネメシスが、屍であるゾンビを止める・・・中々にシュールな画が出来上がる。

「あWWWそうそうWWWこのWWW世界WWWはWWWほとんどWWWがWWW能力WWW持つてるWWWからWWW」

「え？まじか？」

「うんWWW俺WWWはWWW『生ける屍と芝生を増やす程度の能力』だっておWWW」

「あながち間違っではないな・・・」

（俺は・・・）

ネメシスは、自分の能力を探してみる。

『追跡する程度有能力』

『任務をこなす程度有能力』

「やっぱりか・・・しかも2つ・・・」

「どした？WWW」

「なあ、その芝生って消せないのか？イラっとくるんだが・・・」

「無理だおWWW」

「だよなー・・・いや、さっき止められたよな？」

「あれはWWWあれWWWだからWWW無理だおWWW」

我慢できなくなったネメシスは、頼み事してみたが、変な理屈で拒まれた。

「とりあえず、そのへんを散策するんだが、一緒に来るか？」

「あのWWW流れWWWでWWW何故WWWまあWWWいいやWWW  
W行くWWW」

「ネメシスはゾンビを手に入れた」

ネメシスとは女神の名前だそうだ。(後書き)

ネメシスと打ち込む時、ほとんどタイプミスで”ネメイシs”にな  
つちまうorz

あー・・・wwwって表現を使っちゃった・・・どうせ駄文だから  
!:::;

クレームだってなんだって来いよ!受けて見せようぞ!

あ、でもでも、感想とか指摘とかだったら嬉しいなー・・・

## 落散ルノ(前書き)

メッルイイイイイクツルイスツムアアアアアス!!!

訳：メリークリスマス

この小説では、ギャグやウケを重視していきたいんだが・・・

とりあえず頑張って投稿していきます。

ちなみに、ゾンビの”www”表現は以後継続されていきます故に、  
そのような表現が嫌いな方はブラウザBack!(キリッ

・・・をオススメいたします^^;

## 落散ルノ

生ける屍改め、逝ける芝生を仲間にしてから、かれこれ数時間

「つ、ついに森を抜けた」

「うはwww広いwww湖www」

目の前に広がるのは濃い霧に包まれた湖

森を抜けてからその湖が地平線のように広がっているので、広大であることは理解できる。

広い・・・ホントに広い・・・

ここでネメシスは何かをひらめく

「・・・そういえばさあ、お前って『生ける屍を増やす程度の能力』  
つての持ってたよな？」

「うんwww芝生wwwをwww増やすwww程度wwwのwww  
能力wwwもwww」

「その生ける屍を増やして進まないか？」

「無視wwwするなしwwwしかもwwwなぜwwwにwww」



ゾンビはスルーしたことを指摘し、応答ではなく疑問を返す

「いや、なんとなく」

「なんとなくwwwてwwwまあwww俺もwww使ってwwwみたかったwwwしwwwねwww」

とりあえず、ゾンビ地に耳を当て、目を瞑る。

見た目が屍なだけに、どこからどう見ても死骸になった。

「あたいの縄張りに入るなんて！いい度胸ね！」

そんな死骸を眺めていると、背後の湖の方から声が聞こえてきた。

「おい・・・おまえはd」うはwwwチルノwwwじゃんwww」

今度は死骸ゾンビの方から声が聞こえたから、またそっちに振り返ってみる。

「うはwwwホントwwwだwww」

「カワユスwww」

「?www」

「(笑)www」

「大ちゃんwwwは?www」

・・・約20近くのゾンビが群れてチルノを見ていた。

「おい・・・これは一体どういうことだ？」

「あwwwネメシスwwwだwww」

「ホントwwwだwww」

「うはwwwテラキモスwww」

「全俺wwwがwwwそのwwwキモさwwwにwwwワロタwww」

「触手www」

人数と共にレベルアップしたウザさに耐えつつ、産みの本体ゾンビを探す。

・・・いた、物凄く見つけやすかった。

量産されたゾンビは顔がニヤついているにも関わらず、本体は笑っている。

すぐその本体の元へとネメシスは向かい、一発その腐った腹に拳を叩きつけた。

「グハwww貫通wwwしてるwww痛そwww」

「本体WWW」

「・・・おい、俺はあいつらも芝生が生えるなんて聞いてないぞ？」

・・・反応が無い

「WWW」

「おい」

・・・反応が無い

「WWW」

「おい」

・・・反応が無い、ただの屍のようだ。

「しょうg」アタイを無視するなああ！！！！」危なッ！」

「グハWWWテラ痛スWWWワロエナイ」

頭に殴りを入れて、永眠させようと思った矢先、湖上空にいたチル

ノが結晶のようなものを大量に飛ばしてきた。

いや、結晶のようで結晶ではない尖った硬いもの・・・冷たい・・・  
氷だ

氷は未だに大量に飛ばされている。

そしてその氷が、量産ゾンビの集団にも襲いかかった

「ちょ W W W」

「痛い W W W」

「死ぬ W W W」

「生きる W W W」

「逝けよ W W W」

「ヤダ W W W」

胴体の至るところを貫通させられ、脆い部分はもげ落ちたりしていた。

その中で、頭を貫通させられた屍は、次々と再起不能になって、重力に従い、地に倒れ伏していった。

「うはWWW死んでるWWW」

「俺らWWWはWWWとつくにWWW死んでるWWWだろWWW」

「そっかWWW」

一方、ネメシスの方はというと、本体の頭に被弾しないように気をつけながら、盾にしていた。

「ヒドスWWW」

「ふん！アタイを無視したことを後悔するがいいわ！『氷符』アイシクルフォール”」

今度は、まばらに飛ばされていた氷がまとまり、ネメシス達を囲むように飛ばされていった。

「・・・流石に少女を撃つほど冷酷じゃないしなあ・・・そうだ！」

またもやひらめいたネメシスは、盾にしていた<sup>本体</sup>ゾンビを投げ捨て、「ワロエナイw」<sup>量産</sup>ゾンビの集団の元へと駆けていった。

落散ルノ(後書き)

- ・ とりあえず投稿・・・あんまし頭が回ってないから訂正するかも・・・

ク r ( r y

## 逝ける芝生（前書き）

ちきせう・・・深夜一時まで頑張って書いたのに途中からネット繋がってなくて消えたしorz

ってなわけでもた書き直しワロエナイ

Help Me EEEEEERIN!!!

「このウイルス以上に危険な駄文ウイルスは、あの隠れ名医にも治せないのかッ！」



## 逝ける芝生

「まだまだ！」

未だにチルノが氷を放っている。

ネメシスはその氷の投機パターンと、チルノの行動を悟り、軽々と避けてゾンビの集団にたどり着いた。

「・・・悪く思わないでくれ」

「へ？WWW」

たどり着いて真っ先に、ゾンビの頭を掴み、豪快に振りかぶって

「そういッ！」

「ア”アアアアア！WWW」

「ちょWWWナイスWWWスイングWWW」

「ゾンビWWWはWWW犠牲WWWとWWWなったWWWのだWWW」  
「W」

チルノ目掛けて思いっきり投げた・・・力加減？なにそれ  
おいしいの？といった感じに

だが、タイラントは人間離れた筋力を持っており、ゾンビは腐食  
が進行している。

タイラントが振りかぶった瞬間、胴体はもげ落ち、屍が浮かべた気  
持ち悪いニヤけ面が飛んで行った。

「キモツ！・・・ふ、フン！アタイにはそんなの効かないもんね！」

だが、ゾンビの犠牲虚しく、軽々と避けられてしまった。

避けられた頭は、そのまま宙高く飛んで行き、星となってしまった。

『無茶しやがってWWW』

他のゾンビ達は、待ってましたと言わんばかりのニヤけ面で、綺麗  
に横一列になって、星となった場所に敬礼をした。

この横一列はネメシスにも好都合だったようで、順番に掴んで投げ  
る、掴んで投げるを繰り返した。

投げられる方は

「うはwww次www俺wwwかwww」

「星wwwにwwwなつてwww来いwww」

「ゾンビwww逝つきwwwまーす！www」

迷惑とは思ってないようで、むしろ嬉しそうに見える。

「なんでそんなに投げてるのよッ！」凍符『パーフェクトフリーズ』」

「豆腐www」

「おいwww少しwww足りwwwないwww」

「頭腐www」

「イコールwww俺らwwwつてか？www」

「上手くないわよ！ていうか凍符よ！凍符！」

ゾンビ達のコントにすかさずツッコミを入れたチルノ

(いいwwwツツコミwwwだwww君wwwはwww天才wwwだwwwバカwwwだけどwww)

そのチルノを見て、ゾンビがこんなことを思って、チルノにグッドサインを出したまま、凍った。

「うはwwwこおt」

「おいwwwどうs」

敬礼したまま固まっていくゾンビ達

沢山の強化された弾が量産された。ネメシスも、拘束具となっていたコートも一部が壊され、第二形態に突入した。

第二形態となったネメシスは、沢山の手を使って量産された弾を大量に投機する。

「そんな弾幕、チヨロいもんよ！」

だが、避けられてしまう。

「なら、これはどうだッ?!」

触手  
手を使い、残った全てを一気に投げ、転生したてに拾ったスティン  
ガーミサイル（ロケラン）とM202ミニガン（ガトリング）を装  
備した。

そして、トリガーハッピーの如く、チルノに向けて乱射した。

「ちょ！そんなの聞いてない！」

ガトリングの素早くて重い一撃と遅くも追尾をするロケランの弾に  
同様に始めたチルノは、慌ただしくなった。

「おい、戦場ではその行動は命取りだぞ」「ピチューン！」・・・墮  
ちちゃった」

チルノは、謎の効果音を立てて、墜落していった。

とある紅の館にて、一人の少女が書斎で、魔法陣を作っていた。

「フフフ、あともう少しで願いが叶うわ・・・と、これで完成ね、あとこれの起動は・・・2日後くら「パリーン！」キヤア！」

色々と設定している最中に、書斎の窓ガラスが割れ、4・5個何か  
が突っ込んできた。

「お嬢様！」

何事かと、その少女の従者が駆けつけてきた。

「一体なんなのよ!・・・あ、あああ!!!!!間違っ  
て起動しち

やった……」

少女の台詞に、従者は魔法陣の方を見る。

魔法陣は、いかにも起動してます。てな感じに怪しく光っていた。

「これは……」

「なんでこんな時に窓を割って侵入して来るのがある……の……  
よ……」

少女は、突っ込んできたものを睨みつけようとそちらを見た。

「お嬢様？」

従者は、主が顔を蒼白にしているのに異常を感じ、同じ方向を見つめた。

突っ込んで来たものでや、言わずもがなネメシスとチルノの勝負の産物である。

そのネメシスの弾が、気持ち悪い笑みを浮かべながら自分達の方を見ている。（敬礼付き）

傍から見れば、笑える傑作モノだろうが、捉え方が違えばホラーも





## 逝ける芝生（後書き）

相変わらずのD駄ウィルスorz

そして書き直したけど、所々違っていたりするorz

のちのち訂正加えるかもしれない

あと、クレームや感想やその他もろもろ、何かありましたらお待ちしております。

異変？なにそれおいしいの？（前書き）

サブタイ？なにそれおいしいの？

・・・とかまあ色々と気にしたら生きていけないのです。

「面白いwww」という感想が沢山来て、あらびっくり！

「何分、文章力の無いふつつか者ですが・・・よろしくお願いいたします。」

あと、この回で一人称のテストをしてみます。

ので、ちょっと変でイヤだと思われた場合は、感染するとあれなのでブラウザバックを・・・オススメしたくありません……

・・・あれ？一人称って前にやって失敗したなあ……

とりあえずその辺は設定説明でカバー！

異変？なにそれおいしいの？

Side Nemesis

「・・・いいのかな？」

俺は今モーレッツに焦っている。

何故かって？それは幼女を墜落させてしまったからさ

・・・しかし、第二形態からすぐに第一形態に戻れるという事を知ったからどーでもいつか。

「・・・いいんだよね？気にしなくても」

「いいんだおwww」

「うおー！」

また心臓に悪い登場の仕方をしてきたのは、ゾンビだ。

さっきまで死んでた（元からだけど）のに、やっぱり早い・・・

この際こいつに名前を付けようと思ったが、何分”www”という芝生が印象的すぎて”ゾンビ（笑）”しか思いつかない・・・

謎の電波を受信「あれwww突っ込まない？www」しよつにも、  
生憎そついう事が出来ない「おーい？www」身体のよつだ。

いや・・・もしかしたら探せばいるかも「ワロエナイwww」しれ  
ないし・・・ってか

「うるさいよ？その腐った頭を処分して欲しいわけ？」

「ヒドスwwwあwww空www」

「ん？」

何気なく空をしてみる。

「・・・なんで紅いの？」

「知るかwww聞くなwwwしwww」

「いや、聞いてないし・・・むしろ黙ってた。」

「www」

ん？あれ？どこまで話したっけ・・・

S i d e o u t

S i d e Z o m b i e

最初に遭った時はキリツとしたツツコミが素敵だったのに・・・い

まやあのネメシスはドライ

「心WWWはWWWドライWWWだけどWWW身体は又メリWWW」

「ん？何言ってるの？・・・あれ？何か後半変じゃなかったか？」

「何WWWが？WWW」

「・・・いや、なんでもねえ」

あ、そうそう、本当は俺は”WWW”という表現がデフォルトじゃないんだ

あつぶねあぶねWWW

量産の方はデフォルトで出てしまうそうさ。

さて、この機会を借りていろいろと説明していきこうかな？

まず、この世界は幻想郷だね。

次に、俺ことゾンビは、基本的なモノとスキン外見を有名なホラーゲーから拝借させていただいてるんだ。

ネメシスさんこと追跡者も、拝借させていただいてます。ハイ

ちなみに、転生の過程がネメシスには無いのは、俺が神（C P O M）に頼んで消してもらったのさ

転生させてくれた神も同じ

そして、この世界に俺らを送って、俺に”www”とかいうふざけた発言を装着させて、色々とおチャメチャにグダグダにさせている神『ガタツ!』のためにも、ここでまとめさせてもらおう。

ん?なんか音が聞こえたって?幻聴だろ。

・・・まとめるにも俺<sup>ペン</sup>ストーリーしか知らないから・・・これはまた今度だな

ん?あれ?じゃあまとめられないやwww

S i d e o u t

(おかしい・・・ただ黙れって言っただけなのに、こんなに黙るなんて・・・)

ネメシスは、自分が言った言葉に少し後悔をした。

(・・・故障か？いや、でも黙っていられると何か寂しいな・・・)

黙っている時間が長いので、だんだん心配になってきたネメシスは、試しに話かけてみることにした。

「なあ、この紅の空って、一体なんだと思う？」

「ん？あー、それ紅魔卿じゃねえか？」

「あ」

「え？あ」

少しの沈黙・・・ネメシスが大きく息を吸い込んだ瞬間、ゾンビはすぐさま耳をもいだ。



「止らるんじゃねえかああああ！！！！！！！！！！」

湖周辺の森一帯に、ネメシスの怒声が響きわたった。

「すまんwwwすまんwww」

「また着いてるし・・・」

「ん？wあれwww耳wwwがwww消えたwww」

ゾンビは、手元にあっただはすの耳が無いことに気がついた。

「だったら仲間増やして探せばいいんじゃない？」

「wwwどこだしwww」

耳が無いため、ゾンビには聞こえていない。

「あー・・・じゃあこの湖超えるから、追いつけよ？」

言っても返事がない・・・心配になったネメシスは、地面に「湖の先に行ってくる」と書いた。

「んじゃ、追いつけよー」

そして、大胆に湖の中に飛び込んで行った。

やはりとある紅の館にて

ある地下室のドアの前に、従者が5体の凍ったゾンビ量産を設置した。

「外見は恐ろしいけれど、きっと何かのお守りになるはず・・・」

そう、信じて・・・

異変？なにそれおいしいの？（後書き）

毎回夜中に思いついて深夜1時に書いて投稿しようと思ったら、すでにネット繋がってないwww

幸いこのような状況を理解してテキストコメントで対策したからよかったものを・・・

このような小説（？）に感想などを沢山くださり、誠に有難う御座います。

厨二分を撮取したいが故に、ちょっとむづかしい漢字を増やしてみたり・・・

なんてことは無いと思いますので、今後ともよろしくお願いいたします。

ちなみに、今回のゾンビは故障してます故に・・・

P・S前の小説のように、おkゲフンゲフン・・・皆様が面白いと言ってくださったので、力が湧きましたwww

**俺たちや無敵の芝生部隊！（前書き）**

もうサブタイなんてどこでもいいや……

早めの更新です。

**俺たちや無敵の芝生部隊！**

「あー、あつたあつた。」

ネメシスが立ち去ったあともずっと耳を探して30分、ゾンビは、ようやく耳をセットで見つけた。

「で、この耳を元あつた場所にくっつけて・・・ツ・・・と、これでよし。」

耳を装着した後、周りを見渡す。

「あー聴覚障害があるのと無いのでは、世界は違うなー・・・にしても、バレちまったなあ」

自分のさっきの言動を思い出し、少しだけ後悔する。

そして、また周りを見渡す。

「・・・そういえば、あいついねえな・・・どこ行ったんだ？」

ネメシスがないことに”やっと”気づき、思考を巡らせる。

・・・途中で面倒になり、地に伏せて、仲間を増やす

「うはwwwお久www」

「おwwwようwww」

「なんだ？www」

そして、仲間を12匹作ったところで、みんなに目立つ位置に立ち、宣言する。

「隊列を組め！空想を叩く前と後に”サー”と言え！虫けらども！」

(ザッザッザッザッ・・・)

「右よし！左よし！前よし！後ろよし！」

(ザッザッザッザッ・・・)

「俺たちや無敵の芝生部隊！」

『俺WWWたちがWWW無敵WWWのWWW芝生WWW部隊WWW』

「俺がするのは笑うこと！」

『俺WWWがWWWするWWWのWWWはWWW笑うWWWこと！  
WWW』

「走ってよし！」

『走ってWWWよし！WWW』

「笑ってよし！」

『笑ってWWWよし！WWW』



「ニヤけて良し！」

『ニヤWWWけてWWW良し！』

「全部良し！」

『全部WWW良し！WWW』

・・・湖を沿うようにして、二列に並んだ見事な隊列が前進していた。

その隊列の先頭には、かのハーン軍曹と思わしき服装をしている者がおり、その後ろに続くものは皆兵装している。

「むッ！この気配・・・」

突然、ハーマ軍曹が立ち止まった。

後ろに続く者たちは、なんだなんだ？とザワつき始める。

「腐れきったウジ虫ども！その虫けらのそんな分際で、丸腰のまま戦闘に駆り出してやるほど私は鬼畜ではない！よって、ありがたく貴様らに武器を選ばせてやるっ！」

・・・もうこの軍曹、役にノリすぎである。

「どうやらこの辺には活発になってきている妖精がいるらしい。私の知識が正しければ武器となるはずだ！」

未だに追いつけてない計12匹の兵士達は、軍曹の話を、耳をかつぼじるように聞いている。

「一人一匹捕まえてこい！捕まえられなかった奴はこの湖を100周だ！わかったか？」

兵士達は頷く

「よし・・・今から30分だ！30分でお気に入りの娘・・・お気に入りの妖精を持ってこい！わかったなら返事をしろ！分かってなくても返事をしろ！」

『サーワイエツサーWWW』

「なら、さっさと行け！」

『サーワイエツサーWWW』

軍曹に、45度の最上級の敬礼をし、妖精”狩り”に出かけた兵士達

軍曹は、それに軽く敬礼した後、ストップウォッチを取り出す。

? 30分後?

「は、離せ!」

「ひゃわ! ちよつどこ触ってんのよ!」

「うええん! チルノちゃん!」

「こんな奴ら・・・あたしの弾幕で倒せたのに・・・クッ」

個々様々な妖精を持って戻ってきた。

中には緑の髪でサイドテールを結んでいて、見た目からして明らかに他のと違う妖精もいたが、気のせいだろう。

「ちょｗｗｗｗ暴ｗｗｗｗれるｗｗｗｗとｗｗｗｗ危ｗｗｗｗないｗｗｗｗ」

「おとｗｗｗｗなしくｗｗｗｗしろｗｗｗｗ」

「ｗｗｗｗ大ちゃんｗｗｗｗ捕ｗｗｗｗまえたｗｗｗｗ」

・・・気のせいでは無かった・・・

妖精を持ってきた兵士達は、いつもに増して恐ろしく見えた。

幼女な妖精しかいなかったからか・・・はたまたいつも以上にニヤついているからか・・・

「よしッ！では、これから妖精を武器として扱えるように調教しておけ！あとで射撃テストをするぞ！わかったら返事をしろ！分かってなくても返事をしろ！」

『サーワイエツサーW』

一方その頃、ネメシスは

「・・・迷った・・・泣きたくなってきた。」

ゾンビ宛に文字を書いた後、森に入つてある程度進んだ途端に、デツカイ蜘蛛が出てくるわ無数の触手を持った液体状の生き物に遭遇するわ両腕が仕込み刀の甚平を着た男と、その相棒に殺されかけた  
りと・・・

とにかく色々なことがあり、道に迷っている。

「ああ！なんでこんなところに来ちまつたんだよ・・・ん？」

ネメシスは、ふと空を見上げてみる。

「なんだありや・・・あの幕にまたがってるのは間違いなく魔女だな・・・片方は・・・巫女？」

「・・・なあ、霊夢」

「ん？何？」

とある森の道にて、飛行している少女達

声をかけた少女は、いかにも私は魔法使いです。といった白黒のエプロンドレスのような服装をしており、頭にトンガリ帽子を被って

いる。

霊夢と呼ばれた少女は、脇を露出した巫女服を着ている。

「この妖精の数、少ないか？」

魔法使いが問う

「そうねー……でも楽だから気にしなくていいでしょ」

巫女が応える。

「いや、楽だからって……」

「楽に終わらせられるならそれでいいの！先行くわよ！」

魔女は反論しようと思ったが、巫女は適当に返し、スピードを上げる

「ま、待ってくれよー！」

それに追いつくように魔法使いもスピードを上げる。

俺たちや無敵の芝生部隊！（後書き）

・・・今時”どろろ”なんて知ってる奴、あんまりいないかorz

映画〓クゾ ゲーム〓最高 漫画〓知らない

だもんな・・・

あー、やっぱり締めが良くない・・・

クレームや感想やその他もろもろ、何かありましたらよろしくおねがいいたします。



私は諏訪子好きである！異論は認めない（キリッ）（前書き）

・・・サブタイでとんでもなく恥ずかしいことを公言したorz

だが、やはりテキストなので、「真面目なサブタイ考えてくれ」という要望が来るまで

異論は認めない（キリッ）

あ、そうそう、最初はゾンビから始まります。

・・・色々ややこしいので、本体の方は”ZB”にしておきます。

私は諏訪子好きである！異論は認めない（キリッ

30分後

「よおーし！クソツタレども！キサマらの武器とやらの出来を見せてもらおうかッ！」

『サーワイエツサーWWW』

それぞれどこかに行っていたゾンビ達が集合した。

気になる妖精の方かというと・・・何があったのか、目から光が消え、未だにビクビク怯えている。

「いいか！少しでもダメだったら最上級の盾として使ってやるぞ！」

『サーワイエツサーWWW』

「よおしッ！そのクソツタレたニヤケ面に見合う娘・・・（じゃなかつた）武器を構えろ！」

「一の抱えー！」

『サーワイエツサーWWW』

「ヒッー！」

ゾンビ達が一斉に妖精を抱え

「二の構え！」

『サーワイエツサーWWW』

妖精の手を掴み、前に突き出して

「三に狙え！」

『サーワイエツサーWWW』

「い……いやあ……」

妖精の顔の横に、ニヤけ面をくつつけて、手の中指に、テキトーな木を合わせ

その時の妖精は、更に恐怖に怯えた。

「四に撃て！」

ZBの号令の後、それぞれの手の平から光が現れ、大量の弾幕が飛

び出した。

「フフフ・・・上出来だ虫けらども！よしッ！武器も手に入れたことだ！さっさと前進するぞ！」

『サーワイエツサーWWW』

ゾンビがZBを戦闘に、2列に並ぶ

「俺らの敵はリア充！」

『俺らWWWのWWW敵WWWはWWWリアWWW充！WWW』

「奴らになさけは無用だ！」

『奴らWWWにWWW情WWWはWWW無用WWWだ！WWW』

「喧嘩売れ！」

『喧嘩WWW売れ！WWW』

「邪魔をしろ！」

『邪魔WWWをWWWしろ！WWW』

・・・ZB率いる芝生部隊は、湖に沿って、前に進んでいった。

## S i d e N e m e s i s

魔女や巫女を見かけてから数十分

やっこのことで開けた道に到着

あの後も、奇声をあげながら木と木を渡る男性が逃げたり、頭が

爺さんで身体がミノムシの奴から道を聞き出そうとして、異世界に引き込まれかけたり、目から血の涙みたいなのを流しながら、奇妙に笑っている農民を見かけたり・・・とにかくまたまた色々あった。そこで浮かんだ感想が一つ

「こっつて・・・なんでもアリなんだな・・・」

テキトーに回想しながら道に進んでいると・・・

「ウ”ツ！・・・ハア・・・ハア・・・」

衛生兵を要請しそうな状態の中華服の美女を発見！

すぐさまその美女に駆け寄る

「だ、大丈夫ですか?!」

見知らぬ怪我人に声をかける時の第一声は、これに限る

「ッ・・・あつあなたは・・・グッ・・・誰で・・・す・・・か・・・」

美女がこちらを見た瞬間に、更に青くなっただが・・・しかも何気にお祈りまではじめちゃった？！

「あ、えと、大丈夫ですよ？普通に通りかかった人ですから、それに、（このように怪我をしている人を）」

こんな時に襲えるわけが無いじゃないですか・・・とりあえずどこか安全なところに・・・って・・・」

さっきより青くなって、しかもお祈りの速度も上がってるし・・・

あ、気絶した。とりあえずこの美女を木の上のもってって・・・と、ここにかけておけばいいかな？

まあ、この女性はもういいかな？とりあえず先に・・・って、館が建ってるし

とりあえず、お邪魔します。

「ザッザッザッザッザ．．．」

「美少女見つけたら攫っておけ！」

『美少女WWW見つけWWWたらWWW攫ってWWWおけ！WWW』

「美女でもいいから攫っておけ！」

『美女WWWでもWWWいいWWWからWWW攫ってWWWおけWWW』

「リア充は！」

『リア充WWWは！WWW』

「爆破しろ！」



『爆破WWWしろ！WWW』

「消毒だ！」

『消毒WWWだ！WWW』

「消え失せる！」

『消えWWW失せWWWろ！WWW』

・・・段々行進歌が危なくなってきたる芝生部隊

「むっ・・・全たーい、止まれ！」

ビシツと効果音が付きそうな感じに、妖精を抱えたまま止まるゾンビ部隊

「最初は空だけだったのに、だんだん霧になってきているので、絶対離れるな！と、最初に言っておけばよかったが、はぐれている者はいないかッ？」

今更注意事項を述べるZB

「おいwww二草兵wwwはwwwどこwwwだ？www」

「ここwwwだwww」

「はぐれたwwwバカwwwは？www」

「俺www」

「嘘www言うなwwwしwwwいるwwwじゃねえかwww」

「俺wwwのwww片目wwwがwwwはぐれwwwましたwww」

「そうかwww残念wwwだったなwww軍草wwwみんなwwwいますwww」

「よし、では、前方に何かあるか見えるか？」

進む先を指差し、尋ねる

「洋www館？www」

「うはwww先祖www様wwwのwww家www」

「俺のwwwじいちゃんwww5体www不www満足wwwだwww」

「うはwwwサイキョーwww」

「・・・そうだ！館だ！今から俺たちの目的はあの館に侵入することだ！」

「フフォーWWWミスWWW不法WWW侵入WWW」

「おいWWW俺らWWWにWWW人権WWW無いWWWだろWWW」

「そっかWWW」

「では、行くぞ！」

「ザッザッザッザッザ・・・」

芝生部隊は、まだまだ前進していく。

私は諏訪子好きである！異論は認めない（キリッ）（後書き）

・・・もう、どーでもいーや・・・

とりあえず、・・・\*Happy-New-Year\*・・・

今年も良いお年でありますように。

って言うと、自分だけがアレなので

ただハッピーニューヤー

コメディーって言ったって、コメディーだけじゃ成り立たない(前書き)

サブ(ry

ん？ウエスカーって東方の歴史編の初期から入れても問題なさそう

www

・・・試しに書いてみるか・・・というかテスト段階で書いてるけどねwww

ま、そんなのは置いておいて、「move here!」

「コメディーって言ったって、コメディーだけじゃ成り立たない

Side Nemesis

「お邪魔しまーす」

いくらなんでもアリな世界であっても、礼儀は欠かしてはいけない。  
それくらい心得ているさ！

さて、館に入ったはいいものの・・・

なんでドア開けた瞬間からボロボロになった妖精が大量に落ちてる  
訳?!

全員気絶してるし・・・何があった。

「ドーン！」

うお！今度は奥の方から音が！

とにかく行ってみなきゃ！

とりあえずダッシュ！

S i d e o u t

S i d e Z o m B i e (以後Z B)

現在芝生部隊は、3方向から別れて突入しようとしている。

草佐率いる部隊は湖方面から潜入、草尉率いる部隊は正面から、俺こと軍草率いる部隊は森方面から突入していく。

通信系統の物は一切持っていない、俺の知識を使い、集合地点は地下室の前だ。

3方向だから、小学生でも答えられる12÷3をして、一つの部隊4人ずつだ。

・・・とまあ、そんなくだらない説明は置いておいて・・・

「おい、窓の中に人影はあるか？」

「ゼロWWWですWWW」

「ムックWWW装備WWW」

「スタンバイWWW」

現在館の敷地内にある、芝生に隠れている。

何？無理があるって？何を言ってる、俺たちは”芝生部隊”だ。

この芝生という同志に隠れることくらい簡単なことだ。

「くるじっい・・・」

「むがっ！」

「っっ！っっ！」



・・・ただ、妖精は目立つから下敷きになってもらってるけど。

「よし、潜入範囲に敵は見当たらない。今なら入れるかもしれない！行くぞ！」

そう言ってみんなを低姿勢ながらも立たせ、できるだけ目立たないように窓に近づく。

「うはwwwオラwwwわくわくすつぞwww」

「オラもwww」

「わ、わたしも」

「うはwwwカワユスwww」

ん？なにやら後ろが騒がしいな・・・見てないぞ？俺は妖精が寝返ったところなんて・・・

むしろゾンビとお友達状態みたいになってる気がするぞ？

まあいい

「よし、おい、ガムテープみたいなの持ってないか？」

「ガムテープ？WWW」

「なんぞ？WWWそれWWW」

しまった！何か色々なネタを知ってるから同じタイプかと思ったが、こいつらはここで育ってここで死んだやつらだった。

とすると・・・ん？あれ？俺らって・・・「そうだ！」

「軍草WWW声WWW」

「あ、すまない・・・じゃなくて、俺にいい案があるぞ」

ちっぴり、びんびんと言ったらあれだろっ。

S i d e とあるメイド妖精

「急いで！侵入者がお嬢様に近づく前になんとかして倒さないと！」

メイド長がなにやら慌ててる。そういえば、先に行ったメイド達が帰ってこないわ

侵入してきたのは魔法使いと巫女だって聞いたけど、どこにいるのかしら。

「あなた達はそっちから行って！あなた達はそこからよ！」

そう言って、私ともう一人のメイドに、廊下を曲がらせた。

なるほど、挟み撃ちね

早速潰してあゝ「パリーン！」……え？

「何？今の音」

「さあ？きつと他の侵入者だわ！さっさと潰しておかないと！」

急いで音のした方向に向かう

「……この部屋からだったわよね？」

「うん」

誰もあまり通らない廊下に、今私と一緒に来ているメイドが、一つのドアの部屋の前にいる。

確かこの部屋は何も無かったはず……

とりあえずドアを開けて、すぐに弾幕が撃てるように構える。

「誰！……え？」

ドアを開けて最初に目にしたのは、部屋の中ではなく、何かポロポロの……服？しかも物凄く臭い

で、徐々に視線を上に向けてみると・・・

「うはwwwメイドwww萌えwww」

私の意識は、ここでブラックアウトした。

S i d e  
o u t

S i d e  
N e m e s i s

なんでだろう、いろんな箇所からガラスの割れる音がして、悲鳴が聞こえるんだけど。

もう爆音とかが気にならなくなってしまったよ。

で、適当に散策を続けてみたら

「・・・地下？」

半開きになっていたドアの先が真っ暗だったので、除いてみたら階段みたいのがあった。

なにこれ怖い。

「逃げちゃダメだ逃げちゃダメだ逃げちゃダメだ！ネバーギブアップ！」

勢いに任せて突入・・・したら思いっきり転んで落ちちゃった。

で、落ちた先が寒かったんだが・・・

「あれ・・・これは！」

寒かったもとい、冷たかった理由が分かった。

自分が青い少女と戦った時に使った者が5・6個置いてあったからだ。

「てか、なんでこんなところに？ん？ドア？」

氷漬けゾンビを見てると、その奥にドアがあった。

とりあえず、氷漬けをどかして、ドアを開けてみる。

何かちょっと硬くて、ドアノブに呪文てきなのが書かれてた気がするけど・・・開けちゃったから問題無いよね？

「アレ？新シイオン「ボタン！」

・・・よし！とりあえず撤退だ！

と、ドアに背を向けた瞬間に、ドアが爆発した。

非、爆発したにも関わらず、破片などが無い

「アハハハ！待ッテヨ！ン？ナニコレ？」

カタカナ語って、見ても普通にしか感じ取れないけど、実際に聞くと物凄く怖いッ！

しかも、少女が出てきた部屋には、無数のメイドと思わしき死体が積み重なっていて、人体のパーツと思わしきものが所々散らばってるから尚更怖い！

で、肝心の少女・・・なにあれ？コスプレしてんの？と思える赤と白基準の、なんだろう？ミニスカートタイプのドレスみたいなの？とにかくそんな感じの服装をしている。

背中には、枝のような物が生えており、水色、青、紫というふうに七色の宝石がくっついている。

あと、目の焦点が合っておらず、瞳孔も開いてる。

・・・精神異常者が

その少女は、氷漬けにされてるゾンビに目が行ってる。

チャンスだ！

そして、態勢を整えて階段に寄ろうとしたが・・・

また爆発が起こって、今度は天井が崩れ落ちて、出口をふさいだ。

「逃ゲチャダメダヨ？マズは、オニサンカラダァー！」



・・・あのZBみたいに、自然にこのカタカナ言葉が治って欲しい・

そう願う、少女と向き合うため、後ろに振り返る。

何があつたかは知りたくは無いが、そこにあつたはずのゾンビ達は消えていた。

「・・・ねえ」

「ナニ？」

「お話ししようよ」

とりあえず、どこかの道化師を真似て、笑顔を向けてみる。

「アハハ！コワイカオ〜！」

・・・俺の何かが崩れた。

「ソノカオ、ナオシテアゲルー！」

「やっぱり強制イベントか何かか？できれば逃がしてほしいな」

「ヤダ」

「あっそ、じゃあ」

容赦はしない、まともに話し合えるような奴じゃないなら、やられる前にやっておくだけだ。

「M202ミニガンを装備しますか？」

>はい　いいえ

とりあえず、これで蜂の巣にでもなってもらおう。

湖の少女も死ななかつたし、きっとこいつも人外だろう。

その証拠として、その少女の背後には無数の死体があるわけだし。

弾を発射させるために、砲塔を回転させる。

「ナニソレー？新シイオモチャ？」

そう言って、ミニガンに手のひらを向けて

「キュットシテ、ドッカーン！」

「うわっ!」

拳を握った瞬間にミニガンが爆発した?!

いや、ドア同様に破片などが無い。

だけど、爆発は本物のよで、構えていた右腕が吹っ飛んだ。

ちくしょう! あんなことができる奴相手にどうしろってんだ!

「アハハ、コワレチャッター」

俺は……ここで終わるのか……?

「おい! ここだ! ん? がれきが邪魔だな……一斉に構えろ!」

いや、まだミサイルがある。だけどまた壊されるだけだ

「いいか? 良く狙え?」

一か八か……右腕を再生させる。上半身の右半分が今や第二形態の状態だ。

そのまま少女に突撃を試みる。

「撃て！」

だが、その行為を突然遮られた。

「ん？あー……これは予想外……だけど死体は……うん、十分だね！よし！あの少女に突撃だ虫けらども！」

『サーワイエツサーWWW』

「サー！イエツサー！」

後ろのガレキが吹っ飛び、破片などが少女に衝突して、少女は奥に飛ばされる。

幸い自分は、死体の山に衝突しただけだ。

そして、ガレキの元あった場所には、今まで見たこともないくらいに輝かしく見えるZBと、その量産達、そして何故かその量産と同じくらいはいるだろう、大量の妖精達が入ってきた。

コメディイって言ったって、コメディーだけじゃ成り立たない(後書き)

・・・待て、これはこれで大丈夫なのか？

「大丈夫だ、問題ない」

いや、そこは「大丈夫じゃない、大問題だ」だろうが！

コメディーどこ行った・・・

あー、この回読んだ皆さんに、今のうちに言っておこうと思います。

まず、ネメシスですが、実際はガトリングなんて映画の？だけです。

ので、破壊させていただきましたーw

あ、痛い！手榴弾投げ込まないで！・・・え？手榴弾？！

ゲームではロケットランチャーのみで、どこまでもしつこく、そして恐ろしい奴です。

次に、妖精の調教ですが、決してイヤラシイことなんて入ってません。

言葉が言葉だけに、一応・・・

大体ゾンビを考えればありえそうなコトをしました。(部位を・・・して見せ、脅すとか)

あと、あの娘は、EXボスなだけに、結構強めに導入させました。

・・・何かスミマセン

クレームなども受け付けてますので、長文失礼しました。

あ、でも、感想とかの方が嬉しかったりします。

なんかもつ色々といめんなさい (前書き)

うつつちゃったねごめんなさい

別に謝りたいわけでも無かったり・・・あったりするんだけどね  
めんなさい

コメディーが少ないねごめんなさい

コメディー復活に向かうんで許してください

カタカナ語とか厨二ですねゴメンナサイ

スペルカードあまり出てませんねゴメンナサイ

なんかもう色々ごめんなさい

ゾンビ達が狭い地下室に突入する。

ネメシスは正気を取り戻し、死体を除けながら立ち上がる。

少女は

「アハハ！オモチャガ増エター！」

さも何事もなかったかのように立ち上がり、焦点の合わない目でゾンビ達を見て喜ぶ

「一箇所に固まるな！できる限り散開しろ！そして奴の手の向きにも注目しろ！手を向けられたらとにかく逃げろ！」

『サーワイエツサーWWW』

ZBが的確な指示を出す。その姿は指揮官のように見えるのだが、何故か最初にやられない

ゾンビや妖精は、その指示に従って散開する。

妖精は、できるだけゾンビの背後におり、いつでも盾にできるようにしながら弾幕を放つ



「フランｗｗｗｗちゃんｗｗｗｗうふふｗｗｗｗ」

「おいｗｗｗｗ何ｗｗｗｗをｗｗｗｗ考えｗｗｗｗている？ｗｗｗｗ」

「腐乱ｗｗｗｗ仲間ｗｗｗｗじゃないｗｗｗｗかｗｗｗｗ」

「おい！こんな時までコントしてんじゃねえ！さっさとやらねえとやられちまうぞ！」

「サーワイエつぐふ！ｗｗ」

そんな状況でもコントをしていたゾンビがいた。

コントをしていたゾンビに、ZBがツッコミ(?)を入れて止めるも惜しく、そのゾンビ2体は消し飛んだ。

「クソツ！時間を稼いでくれ！」

ZBはそう言って、死体に紛れ込むようにして横になる。

「”禁忌「フォーオブアカインド」」

少女が呪文のようなものを唱える。

すると、少女の数が増え、一人だったのが四人になった。

「お前らの真似だ！喰らえ！」芝腐「これはゾンビZombieですか？いいえ  
弾丸Ammoです」「」

ネメシスも何かを唱え、付近にいたゾンビを持ち上げては投げる、持ち上げては投げるを繰り返していった。

「うはwwwヒドスwww」

「ああ！まだ投げないでよ！」

「優しいwwwうれしいwww」

「盾が無くなっちゃうじゃない！」

「www」

妖精の批判を受けようが気にせず投げまくる。

だが、少女Yが次々と飛んできたゾンビを破壊していくため、もう数が少ない

と、何やら山になっていた死体が崩れ始めた。

「ん？」

ネメシスは、崩れた山の方を見る。

そこには、無数の、産まれたばかりの小鹿の萎えた足取りのように立っているメイドがいた。

非、メイドではなく、”元”メイドだ

今は

「あ”アアアア！！”

怨念を持つ動く屍だ。

(あれ？なんでこいつらは芝生が付かないんだ？)

ネメシスは疑問を持ちながらも、増えた弾丸を投げまくる。

今度の弾丸は、投げなくとも敵に向かっていくようだ。

敵となっている少女の元にたどり着くと、手、頭、足やその他いろいろと押さえ込んだ。

「イタ、イタイ、イタタタ、ハナシテヨー、ナンデソナナコトスルノ？イタた」

もう攻撃する必要は無くなったと思ったのか、少女への攻撃が止んでいる

「痛い！痛い痛い痛い！離して！誰か、誰か助け」

「ア”アアアアアア！！”

「嫌ああああ！！！！！！”

どうやら正気に戻ったようだ。

開いていた瞳孔は元に戻っている。

「そこまでだ、あとはもう臨終していいぞ」

ZBがそう告げた後、メイドの屍達が次々と倒れていった。

「……というか、ゾンビを怖がる吸血鬼がいるなんて、笑いものだよ」

『ワアアアアアア！！！！！！！』

ZBの決めゼリフ（？）の後に、妖精とゾンビの歓声が響いた。

と、同時に、大量のナイフが降りかかってきた。

「グハWWW」

「盾WWW」

「マジWWWでかWWW」

それを確認した瞬間、妖精はメイドの死体や、近くのゾンビを盾にしてナイフの雨を防いだ。

「・・・貴方達は何者ですか・・・」

ネメシスや、ゾンビといった気持ち悪い化け物の集団が、一斉に声の方に振り向いた。

そこには、血の気を引き怯えながらも、勇敢に立ち向かおうとするメイド長の姿があった。

なんかもじ色々といめんなさい (後書き)

作「コメディー！」

コ「作者！」

「エンラー！イヤー！ユーハッピーニユアー！」

作「コメディー……！」

コ「作者ああ……！」

「ドコオ！」

短かったですねゴメンナサイ

感想など待ってます。ごめんなさい

## PADvsDead(前書き)

サブタイ、特に意味はありません

ただ、サブタイもネタ扱いしていると思ってください

「サブタイの心得を手に入れた」

## P A D v s D e a d

「あ、貴方達は何者ですか！」

怯えながらもメイド長は言う

「何者って言われても・・・」

ネメシスは口ごもる。

自分は見てのとおりのはけ物です

で、済むかもしれない話だが、メイドとは従者

こちらにはその従者の主のような人(?)を囲んでいる。

多分だが、はけ物＝主を食べると、解釈してしまうだろう。

と、そんな時、ZBが口を開いた。

「俺たちは、国に属さなグフツ！」

危ない危ない・・・どこかの天国の外側の傭兵さんにならなくては  
いけなくなるところだった。



「俺wwwたちwww無敵wwwのwww芝生www部隊www」

「俺wwwのwww彼女wwwはwww募集www中！www」

いきなりゾンビが歌いだした。

「笑ってwwwよし！www」

『笑ってwwwよしwww』

ゾンビと妖精が笑いながら言う

「ニヤwwwwwwけてwwwwwwよしwww」

『ニヤwwwwwwけてwwwwwwよしwww』

ニヤけながら言う

「芸wwwwwwよしwww」

『芸wwwwwwよしwww』

ゾンビと妖精が協力して綺麗な装飾弾幕を張る。

「・・・もういいわ、分かったから、とりあえず敵では無いのね？」

「うんwww」

(メイドwww萌えwww)

(うはwwwさっきゅんwww)

ようやくメイド長は分かってくれたようだ。

だが、若干少数のゾンビの目が怖いぞ？何を考えている？

ネメシスは、メイド長に歩み寄り、色々と訂正したり、なんやかんやして、とりあえずあの少女について聞いた。

「あの娘は、お嬢様の妹様です。名前は、フランドール様です。妹様はこちらの世界に移った時には既に能力が暴走しており、危険だからといって幽閉しておりました。

しかし、長期間幽閉していたせいか、精神状態が保たれずに、狂ってしまいました。」

「長期間とは？どのくらいでしょうか？」

初見なので、敬語で話す。まだ完全に信用しているわけじゃないから。

「確か・・・425年くらいだったと思います。」

『な、なんだってー!!!（WWW）』

その場にいたメイドの死体や、妹様以外の者が大声をあげた。

「うはWWWそんなWWWにもWWW長くWWWかWWW」

「よくWWWこんなWWWにWWW保たれたWWWなWWW主にWWW肉体WWW」

一人のゾンビが、そのフランドールに近づくと

しかし、目が異常である。

「！妹様に触るなッ！」

「うは！WWW痛いWWW」

メイド長が消えたかと思った次の瞬間、フランドールに近づいていたゾンビの腕に、ナイフが刺さる。



「いや、危なかったねーw」

「おい、また戻り始めてるぞ」

「あーwいいのいいのwそんな細かいコト気にしちゃw w w」

現在、館の外にいる。

妖精達はみんな逃がし、ゾンビ達はそれを追いかけてどこかに行っ  
た。

地下室に残っているゾンビ達は・・・骨も拾ってもらえないだろう

「でもよー、何かつまんねーなー」

ZBがあくびをしながら言う

「何がだ？」

ネメシスはその問いを聞く

「いや、だってよーこの世界に来て俺って仲間増やしてばかりじゃん？なのにお前は銃とか使って戦ってるし」

「いや、まあそうだけれども、それでも別にいいんじゃないか？」

「いやwよくねえしwww」

ZBとネメシスは談笑しながら門にたどり着く。

「あー、これからどうすっかなー・・・」

「そうだなwこー」「妖怪を見つけたぜ！」「最後まで言わせるしww  
w」

二人同時に声の聞こえた方を向く

そこには、ネメシスが一度見かけた魔法使いと巫女がいた。

「妖怪？ならさっそく退治してもうけなきゃね！」

「新しい実験材料になってもらうぜ！」

巫女はともかく、魔法使いが何やら物騒なことを言ってきた。

「おい、お前にとっちゃいい機会なんじゃないか？」

「そうつばいなWさてWそんなじゃ早速WWW戦ってみようWWW」

「 巫女と戦う

>魔法使いと戦う」

**P A D V S D e a d (後書き)**

グダグダ・・・意味不明・・・寝起き投稿はやっぱり頭が廻らない

(泣)

後で訂正するかもしれませんが

感想やその他何かあったら、教えてください。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5420z/>

---

ネメシスとして幻想入り

2012年1月6日11時52分発行